豊明希望チャペル礼拝

2026/11/15

「日々自分の十字架を負い従いなさい」

ルカの福音書 9：18～27

前回は、いわゆる 5000 人の給食の箇所から教えられました。

その時、イエス様が、「**9:14 というのは、男だけでおよそ五千人もいたからである。しかし、イエスは弟子たちに言われた。「人々を、五十人ぐらいずつ組にして座らせなさい。」**」と言われたとき、私は、それは、恐怖だと言いました。

もうそんな段取りを始めたら、後に引けない、逃げられないからです。



しかし、弟子達は、不退転の覚悟を決めて、確かに、とにかく、前に一歩進みました。一歩だけでも前に出ようと。「**9:15 弟子たちはそのとおりにして、全員を座らせた。**」なんと実行した。一歩、前に出たことを見ました。

清水の舞台から飛び降りるではありませんが、その一歩を踏み出したら、そのまま下に落ちて死ぬかもしれない、まさに死を覚悟するような一歩であったのではないでしょうか。そのエピソードに続く今日の箇所であります。そして、この文脈で、今日の後半の箇所で、イエス様の、弟子達に求められていることは、極めて、ある意味で、レベルの高い命令、イエス様のお言葉だということを、先に言っておきたいと思います(今日は、そこを中心に教えられていきたいと思います・・)。先に、その今日の後半のこの言葉、今日の中心聖句を読んでおきます。

「9:23 イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」

それで、まずは、そこに至る、前半部分を見ましょう。イエス様は誰かと言う問いを、イエス様ご自身から弟子達に問うた、その場面です。



「9:18 さて、イエスが一人で祈っておられたとき、弟子たちも一緒にいた。イエスは彼らにお尋ねになった。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」9:19 彼らは答えた。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人たち、昔の預言者の一人が生き返ったのだと言う人たちもいます。」9:20 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えた。「神のキリストです。」9:21 するとイエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さな

いように命じられた。9:22 そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた。」

イエス様を救い主と指し示し、イエス様に洗礼を授けた、バプテスマのヨハネは、ヘロデによって投獄され、獄中からヨハネの弟子を通してこう、聞きました。

マタイの福音書「**11:3 イエスにこう言い送った。「おいでになるはずの方はあなたですか。それとも、別の方を待つべきでしょうか。」**」

イエス様を紹介した人なのに、不安になったのでしょうか、疑問が生じたのでしょうか。いずれにしても、ヨハネの死を前にしての、死を前にしての最後の問いで、それほど、真剣だったことは確かです。それに比べると、今日の箇所は、直接的に、あなたはどうおもうか？と聞かず、人々はどう言っているか？という質問になっています。

「**群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。**」と。弟子達は、答えます。一人は、「バプテスマのヨハネ」だと言っていると。

これは、特にヨハネが死んでから、そういう噂が広まったようです。特に、ヨハネを殺したヘロデは、そう思ったようです。

マタイの福音書「**14:1 そのころ、領主ヘロデはイエスのうわさを聞いて、14:2 家来たちに言った。「あれはバプテスマのヨハネだ。彼が死人の中からよみがえったのだ。だから、奇跡を行う力が彼のうちに働いているのだ。」**」

弟子達は、エリヤとも言っている、エリヤは、預言者を代表するような人物ですが、人によっては、エレミヤか？イザヤか？と他の預言者が生き返ったという人もいると言いました。

ペテロは、バプテスマのヨハネや、その他のどんな預言者でもない、それ以上のお方だといい、こう告白します。

「**ペテロが答えた。「神のキリストです。」**」と。ここで、マルコの福音書、マタイの福音書では、いかにペテロの告白が、いわば、口先だけの言葉であったかを問題にして、イエス様の次の言葉を、イエス様が死ぬなんて、そんな事を言うものではありませんよと、イエス様をいさめて、「サタンよ退け」と叱責されます。

ルカの福音書では、そんなペテロの思いを試すように、その神のキリスト、すなわち救い主が、殺されても、十字架についても、それでも、私を神の子だ、キリストだと言えるか？と問うように、いわば、キリストが十字架にかかっても、私を見捨てず、その告白のまま、私に従えるかと、ペテロを試すように、こう念を押されました。

「**イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じられた。9:22 そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた。**」」と。

この文脈からすると・・捨てられ、殺されても、私に従えるかと聞くかのように、ペテロらに念を押して言われているのだと思います。

あなたがたは、宣教に出て、すべてが満たされる経験をして、たった 5 つのパ

ンと 2 匹の魚からでも、5000 人以上が養われる経験をしたから、私が死んでも、また、3 日目のよみがえるという事を信じることが出来るよね・・と、念を押したと言うことであります。

最初に、私が、ここはきわめて、レベルの高い事を聞いている箇所だと言いました。そして、この流れの中で、今日の中心だと言った、自らの十字架を負って私に従えという命令があるのだと言いましたが、そう、この文脈の中で、尋ねた問いが、命令が、この言葉だと言う事です。今日の中心だと言いました、後半部分は、先に引用したとおり、こう始まります。

「**9:23 イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。**」と。

この文脈と言う事になると、この高いレベルの命令、あるいは問いは、ペテロら、使徒達への命令だと考えるかも知れません。しかし、他の福音書をみると、それもあるが、すべてのクリスチャンに問い、命令していることだということがわかります。マルコの福音書を見てみましょう。

マルコの福音書「8:31 それからイエスは、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。8:32 イエスはこのことをはっきりと話された。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。8:33 しかし、イエスは振り向いて弟子たちを見ながら、ペテロを叱って言われた。「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

そして、ここです。

マルコの福音書「8:34 **それから、群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。**」

「**それから、群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて**」と、弟子達だけでなく、ここからは、向き直るように、あるいは、弟子達だけに語られていたことを、今から言うことは、弟子限定ではないよ、すべてのクリスチャンへの命令だよというかのように、あえて、群衆を呼び寄せて、言ったというのです。それが、このルカ 9:23 の言葉「**日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。**」だと言う事です。

すでに終わりの方になってきてしまいましたが、こここそ教えられなければならないわけですが、いったい、このすべてのクリスチャンに命令されている、「**日々自分の十字架を負って、**キリスト**(わたし)に従**」うとは、どういう事かと言う事です。

結論を急ぐようで申し訳ないのですが、この厳しい文脈のレベルからすると、たとえば、こういうこと、そのことではない、それ以上のことだと言う事だと思います。すなわち。

この十字架とは、各自のかかえている、弱さや特徴、たとえば、**性別、年齢、健康状態、社会的地位、教育、経済力、国籍、人種、肌の色**などによって、それぞれが負うべき十字架は違のだというような、そういうことが、十字架ではない、そ

うこととは全く、**関係ない**ということです。わたしの弱さや、さらには過去の罪とその罰をおった経験などを、十字架といってはならない、そのようなものではないということです。

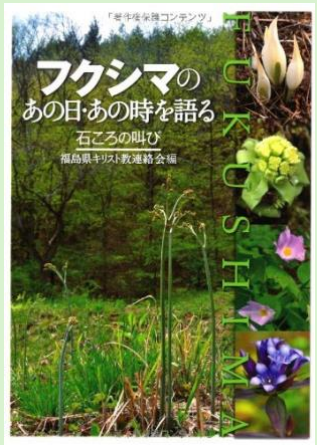
それはまさに、「**9:24 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う**」覚悟であり、「**だれでも、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子もまた、自分と父と聖なる御使いの栄光を帯びてやって来るとき、その人を恥じます。**」という、迫害にあっても、言葉ひとつも裏切らない、言わば、殺されても、私はクリスチャンだと言う、キリストに従うと公言してはばからない覚悟を問うている、しかも、献身者、あるいは使徒たちだけではなく、すべてのクリスチャンに問うといると言うことです。

イエス様に従うと言うことは、従う事に苦しみや痛みがあっても、それでも従うと言うこと、あるいは、苦しみどころか、従った結果、自分が死んでしまったとしても従うと言うことです。そのことが問われ、命令されていると言う事です。

今日、このことを来て、え？と尻込みされ、あるいはつまずかれた方もおられるかもしれません。しかし、やはり、このことが問われていると言うことを、注釈無しに、お伝えする責任が私にはあるのだろうと思っています。

ただ、ペテロは、ルカの福音書にはありませんが、サタンよされと言われ、とても十字架を負ってイエス様に従う者としては足りないことを暴露､証明してしまいました。私たちも､この命令､この言葉の重さを思うほどに､不安になるのです。





私は、2011 年 3 月の震災で、原発がメルトダウンし、あわや、東日本がすべて汚染されたかもしれなかった、あの時、福島のボランティアにお訪ねして、ショックだったのは、あそこの牧師は、教会のドアに、「逃げます」の告知を貼って、日曜日に訪れた信徒たちが、その告知の前で呆然とした、そんな事実があったことを聞きました。また､別の牧師が､若い牧師で、妊娠中の奥さんを関東の実家に帰し、そのことが、現地のクリスチャンたちの中で問題になっていると聞きました。

後日､『フクシマのあの日・あの時を語る～石ころの叫び～』という牧師や、信徒たちの証集が出ました。その中で、ある牧師がこう告白しました。「震災直後の主日礼拝を休みとし・・白河に避難した後に、安否を問う教団本部からの電話に対して、まだ福島にいると嘘をついたことを、正直に告白しています。そしてこう言います。「電話を切った後、私はしばらくぼんやりしていましたが、心の中にペテロがイエスさまを裏切って、三度も拒んだ聖書箇所が浮かんできました。ペテロの気持ちが非常によく分かりました。あらためて自分は弱い人間だな、たいしたことないなあ、情けないなあと思いました。そして同時に、こんな私をイ

エスさまは、愛してくださり、救ってくださり、伝道者の末席に座すことを許してくださっていることに感謝しました。」」と。

さて、今日、自分の十字架を負ってイエス様に従ってこそクリスチャンだと教えられました。しかし、同時に、私が、その招きに応えきれないものであることも自覚するのです。

今週の歩み。どうぞ十字架を負わせて下さい、命がけでイエス様に従わせてくださいと祈り、私を召してくださりクリスチャンとして下さった事を感謝します。精一杯あなたに従う事が出来ますようにと祈りつつ歩む、この週とさせていただきたいと思います。